

Departure English Expression

授業を変えよう，生徒を変えよう

— *Departure I・II* を使って

山岡 憲史



◆新課程での授業改善

新学習指導要領のもとでの授業が開始されて1年が経ちました。4技能統合型の授業や「英語で行うことを基本とする」授業で入試に対応できる学力は保証できるのか、英語で授業を進めて生徒は理解できるのかなどの戸惑いから、従前の指導観を変えることに躊躇している先生方も多いのではないのでしょうか。

私は、過去2年間、文部科学省「英語力を強化する指導改善の取組」の運営指導委員として、福岡県、鳥取県、兵庫県、滋賀県の指定校に関わってきました。どの学校でも、不安を抱えながらのスタートでしたが、先生方と県教委の努力による授業改革を通じて、生徒の授業に臨む姿勢が見事に変化してきたことに驚きます。CAN-DO リストに基づいた有意義な言語活動や All English の授業展開は、意欲だけでなく、模試や GTEC などでの好結果にもつながっているという報告も受けています。「もう昔のような授業には戻ってほしくない」という生徒の声、「英語が苦手な生徒たちがとても意欲的になってきた」という先生方の声を聞くと、先生方の姿勢ひとつで、劇的なパラダイムシフトができることを確信しています。

◆ *Departure I* で表現の基礎力を

Departure English Expression I は、このようなパラダイム転換を目指して、「強い意欲と確かな表現力をつける」ための教科書として誕生しました。

旧課程での指導は、高校で習得されている文法

事項を1年生ですべて学習させ、和文英訳を超えたライティング指導は2年生以降で行うことが通例でした。しかし、文法事項を詰め込んだだけでは、すぐ表現力を伸ばすことは望めません。表現に必要な最小限の文法事項を確実に定着させ、それを使って実際に書いたり話したりする指導から始めること、それも1年生から始めることが表現力を伸ばす鍵だと考えます。

Departure I では、このような方針のもと、まず、精選された文法事項を使って、4技能すべての活動を行います。特にライティング活動では、習得させるべき言語材料を使い、かつ文章構造や論理展開を意識させながら書かせることを大切にして、無理なくライティングに慣れることを目指しています。また、書いたことをもとに話すという手順を踏み、内容を伴った正確なスピーキング力を養えるように配慮しています。

◆ *Departure II* でより高い表現力を

Departure II では、*Departure I* でつけた1パラグラフを書く力と正確に話す力をさらに高めるために、多くの工夫を施しました。

Part 1 では、*Departure I* で学んだ事項を文構造や表現別に復習し、より高度な事項を学びます。Part 2 では、使うという観点で、機能的に表現を提示しました。Part 1, 2 で英語で表現するための技法として重点を置いたのは、日本語の言い換えによる英作文の練習です。この力は、伝えたいことを簡単な英語で表現するための訓練となり、国公立大学二次試験の和文英訳に対応す

るためにも大きな力を発揮することでしょう。

英語を読んでから書いたり話したりする活動も充実させました。Part 1, 2 とも、知的な関心や、問題意識を喚起する文章を読んで感想や意見を述べる活動を設けています。また、Part 2 には、読解した文章の構成を分析し、それに倣ってレッスンのテーマに沿った内容で1パラグラフを書くという活動があります。これは、*Departure I* で行った、書く内容と言語材料を準備した後に1パラグラフを書くという活動を深化させたものです。提示された語彙と表現を使って何をどう書くかを考えて、内容的にまとまった説得力ある文章を書く力をつけることを狙いとしています。さらに Part 3 では、複数のパラグラフを書くための手法を、ブレインストーミングから骨格作り、肉付けと手順を踏んで示しています。

◆大学入試を見据えて

これまで行われてきた知識を多く学び取らせることが主眼の授業は、出題された問題に対処するためにその知識を援用することが目的であったため、クリティカルに発想するという視点が欠けていました。それに対して、自己表現を目的として積み上げる指導は、英文を読んだり聞いたりする活動を、問題を解くことからメッセージを受け取ろうとする姿勢に変え、読む時にも文章の構成を意識して読むことができる independent readers へと育てていくことでしょう。また、前述のように、自己表現活動は大学入試のライティングの力を大きく伸ばします。高校入学時に英語がさほど得意でなかった生徒が、国公立大学の二次試験の自由作文は「楽勝でした」と喜んでいたことを思い出します。

私が講演などでよく使う喩えですが、これまでの受験指導は、山の頂を目指して険しい1本道を歯を食いしばって登らせていたようなものでした。しかし、All roads lead to Rome.——遠回りのように見えても、自らさまざまなことを体験

しながら頂上に登るような指導こそが、学ぶ楽しさや意欲を与えるのではないのでしょうか。そのような生徒は、また、別の山に登ろうとする意欲を持つことでしょう。

◆スピーチやディベートができる生徒を育てる

大学の英語教育も、発信型、プロジェクト型に変わろうとしています。グローバル社会で活躍するためのツールとしての英語力を養うためには、基礎力に加え、プレゼンテーション、スピーチ、ディベートなどのスキルが求められます。詰め込み型の受験指導で育ってきた学生たちは、容易にそれに対応することができず、英語に対してネガティブな気持ちを持ってしまう。

Departure II では、Part 4, 5 で、このようなスキルを身につけるための懇切丁寧な手順を示しています。どの活動でも、Part 3 の複数のパラグラフを書く練習を基礎に、実際に発表や討論をします。全国高校生ディベート大会の参加校も年々増加していますが、生徒たちは教室でディベートやディスカッションに生き生きと取り組むことでぐんぐん英語力を伸ばしています。指導書には詳しい指導手順が書かれていますので、指導経験のない先生方も、ぜひその楽しさを味わってください。

先ほど、受験指導を山の頂上に登ることに喩えましたが、受験の頂が英語教育の最終目標ではありません。さらに高い峰へと挑戦する意志を育て、その体力を鍛えることも、高校英語教育の大きな目的であると思います。

3年間でどのような生徒を育てるか——それは英語教育を通して、将来さまざまな問題や課題に積極的に立ち向かえる力をつけることではないのでしょうか。「高校の英語教育を通じて学んだ最大のは、自分の意見を持つこと」——そのような生徒を育てるために *Departure* がお役に立てることを切に願っています。

(やまおか けんじ・立命館大学教授)